

2000年夏合宿劔岳事故報告書

信州大学山岳会

はじめに

去る2000年8月25日、劔岳周辺の岩場の登攀を目的とした夏合宿中に落石により現役部員1名が足の指を骨折するという事故を起こしてしまいました。事故そのものは実に些細なものでありましたが、骨折により歩行不能になった部員の搬出はヘリでの救助に頼らざるを得ず、結果として多方面に様々な形でご迷惑をかける形となりました。今回の事故は実際の経験として事故を知らない現在の山岳会の現役部員にとって事故の間接的な要因である普段の取り組み、指導的立場にある上級生の責任意識、事故に対する認識、緊急時の留守本部のあり方などにおいて、少なからぬ反省と改善の必要性を強く認識させるものでありました。今回の事故が我々に与えてくれたものを風化させないためにもここに事故報告書を作成致します。

————— 全ては安全なる登山のために。 —————

信州大学山岳会代表 岸本 俊朗

—目次—	ページ数
はじめに	… 1
合宿計画の概要	… 2
事故の概要	… 3
事故の原因	… 6
事故の背景	… 6
事故処理における問題点	… 7
今後の対策	… 7
佐藤の報告	… 7
会計報告	… 8
終わりに	… 9

合宿計画の概要

①場所

北アルプス劔岳周辺の岩場

②期間

2000年8月23日～31日（31日は予備日）

③目的

アルパインクライミングにおける技術、経験の向上。

③参加メンバー

4年：岸本俊朗 大木信介 日高弘次

3年：梶原恵 横山勝丘 横山輝生 松寄林太郎

2年：野川謙介 中村圭一

1年：佐藤祐樹 林勝也 宮西堅司 矢野航

5年：麦谷水郷 (計14名)

④行動計画

8月23日 松本～扇沢～黒部ダム～内蔵助平：幕営

24日 内蔵助平～ハシゴ谷乗越～真砂沢ロッヂ～長次郎谷
～熊の岩（ベースキャンプ）

25日 }
↓ } 周辺の岩場での登攀活動
29日 }

30日 下山（往路）

31日 予備日

事故の概要

①事故発生日時

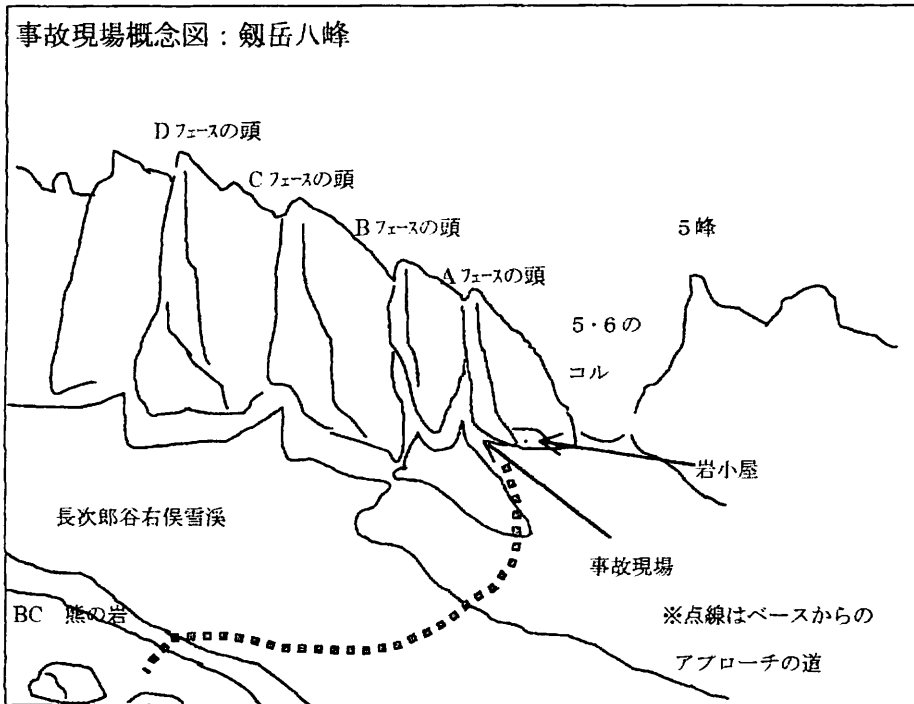
2000年8月25日午前9時00分

②事故者

佐藤祐樹（理学部1年・19歳）

③事故発生現場

劔岳八峰Aフェース～Bフェース間のガレ場



④天候

晴れ

⑤前日までの行動

23日 5:30 松本発～黒部ダム～14:00 内蔵助平着

24日 5:20 T・S発～ハシゴ谷乗越～17:15 熊の岩着

⑥事故発生状況

登攀1日目のこの日は全員で八峰のA・B・Cフェースの各ルートに登攀する予定であった。また松寄(3)野川(2)パーティーは6峰から5・6のコルへのFix設置後に登攀に移る予定であった。前日は若干到着が遅く、荷揚げの疲れを考慮し、この日の炊事テントの起床は7:00であった。朝食後、身支度・体操をパーティー毎に行い出発は各隊ともに8:30前後であった。雪溪の通過は初日であるこの日は全員ピッケル、アイゼンを着用した。雪溪の状態はすこぶるよかったが、さすがに1年生はまだアイゼン歩行に不慣れな様子であった。パーティー毎にフェース基部にある岩小屋にて登攀の準備をし、準備の整ったパーティーから各ルートの取付きへとアプローチを始めた。日高(4)と佐藤(1)パーティーはCフェース「劔稜会ルート」に登る予定であったため皆と軽く挨拶を交わしCフェースへと移動を開始した。事故はその直後に、先行していた日高と同じ所を佐藤が通過する際、佐藤が岩棚の上に乗っていた大きな浮石(直径約60cm～70cm)をホールドにして登ろう

としたところ、その浮石が動き佐藤の右足に落下、直撃する形で発生した。浮石はそのまま落石となり長次郎谷へと落ちていった。

⑦事故後の対応

【現場、熊の岩での】

8月25日 9:00事故発生

この時点での他パーティーの行動は以下の通りであった。

松寄 (3) 野川 (2) … 6峰への Fix 工作中
大木 (4) 宮西 (1) … A フェース「中央大ルート」登攀中
梶原 (3) 中村 (2) … B フェース「京大ルート」基部
岸本 (4) 矢野 (1) 林 (1)
横山・勝 (3) 横山・輝 (3) } … 岩小屋にて準備中

佐藤の起こした落石はかなり大きなものであった。岸本は不安を感じ日高の名前を呼んでみるが反応がなく横山 (勝) が様子見に行く。どうも落石が佐藤の足にあたったらしいとの報告をうけ岸本も現場へ向かう。佐藤は B フェース基部の安定した岩棚の上に座っておりすぐそばに日高が付き添っていた。先に基部についていた梶原と中村は佐藤の歩行での下降を不可能と判断して、早くも懸垂下降の支点作りをしていた。佐藤の状況は右足甲部が内出血を伴ってパンパンに腫れ上がり、小指と薬指の向きが正常な状態と外れた向きを向いており、外見上骨折の可能性が高い事は明らかであった。しかしながら幸いにも出血はなくその他の外傷も皆無であり、本人もショックを受けているようだが元気であった。岩小屋にいる横山 (輝) に大木、松寄の各パーティーに事故の発生を知らせにいかせ、とりあえずを現場から岩小屋、熊の岩のベースへと佐藤の搬出を開始した。懸垂下降は佐藤を背負って行う事も考えたが佐藤が右足以外は無傷であり、人を背負っての懸垂は不慣れな上にかえって危険であるため、下にサポートを置き自分で降りてもらった。懸垂後、ベースまでは一番馬力のある横山 (勝) が佐藤を背負い岸本と日高がサポートに回り搬出を行った。その際、岸本は梶原に事故通知カードの記入を、横山 (輝) には1年生2人の引率を指示した。

10:00熊の岩への搬出終了

到着後は大なべに水を張り雪溪の雪を加え、そこに佐藤の足を入れて患部を冷やさせた。前述の通り、大木・宮西パーティーは事故発生時 A フェース「中央大ルート」2ピッチ目を登攀中で、松崎・野川パーティーは6峰の Fix 工作中であったそれぞれ行動を中断して下降させるには中途半端なところにいたので2パーティーにはそれぞれの登攀が終了後ベースに戻ることにし、それ以外のメンバーは皆ベースに引き

上げた。岸本は登攀中の上級生の到着を待って佐藤の処置に着いてリーダー会を開く事も考えたが、佐藤の怪我が一刻を争う致命傷ではないにせよ、ヘリでの救援に頼らざるを得ない事は明白であり、怪我人は早くに下に降ろすのが鉄則であるため、日高と梶原に真砂沢ヒュッテに現役留守の川井への連絡とヘリでの救助依頼に行かせることにした。なお梶原は真砂沢～熊の岩間の無線の感度を考慮し長次郎谷と剣沢の出合いに待機して中継役をしてもらうことにした。

10:50 日高・梶原出発

2人は「事故通知カード」の写しと通信費一万円を持って出発。出発後まだ八峰に残っていた2隊もベースに戻った。

11:30 日高真砂沢ロッヂ着

まず日高は小屋の遭対無線を借り、県警に事故の発生の報告と救助依頼をした。

12時に防災ヘリの出動が決定したと日高から岸本に無線が入り、続けてヘリの到着時刻、ヘリの接近に備えてベースのテントを撤収するよう、指示がなされた。

12:20 ヘリ到着、佐藤収容

無線での予告通りヘリが長次郎谷に現れ我々の姿を確認するとサイレンを鳴らし接近をはじめた。ちょうどテントサイトの真上でホバリングをし、中から救助隊員の方が吊り下げられて降りてきた。佐藤をすばやく救助用のウインチに固定すると佐藤を抱き込むようにして一緒に吊り上げられ、収容が済むとヘリはすぐに機首を返し八峰を巻くように超えて視界から消えた。あっという間の出来事であった。

12:30 現役留守川井に第一報

日高は救助依頼後、現役留守の川井、豊田OB、学生部の順で連絡をした。川井との連絡は全部で3回行い、その中で川井から現場の人間を一人、下に降ろして欲しいとの指示があり現役は大木を佐藤の収容先の病院へ降ろすことにし、日高はその旨を川井に伝え、ベースへ戻りはじめた。

1:45 大木出発

大木はこの時点ではいったん佐藤の収容先である富山中央病院にいき、佐藤の付き添いについた後、二日後に合宿に途中参加する麦谷と再度入山し合宿に合流する予定であった。

3:45 日高、梶原ベース到着

役目を終えた二人が戻り現場での事故処理は一応の収束をみた。

【下界、留守本部の対応】

12:00～ 日高から川井へ第一報

川井は現役の麦谷に連絡。手分けをして原田、花谷に連絡。豊田 OB にも連絡するが既に日高から報告がされていた。

13:00～ 日高から第二報

- ・この連絡は佐藤の収容後になされ、川井は現場の人間を一人、下山させることを提案した。
- ・富山中央病院から連絡が入り佐藤の引取りを要請される。
- ・川井から佐藤の両親に連絡をする。しかし既に学生部から事故の発生だけは連絡されていた。

14:30～

川井は引き続き待機、麦谷が佐藤を迎えに行く事に決定し、出発。

19:00 富山到着

佐藤を収容し松本へ。

24:00 松本到着

麦谷は佐藤を自宅に返し川井に連絡。川井は留守電で大木が室堂から熊の岩ベースに戻る事を知る。

8月26日～その後

大木は25日、室堂まで行き、まず収容先の病院へ電話をして佐藤と連絡をとった。電話越しであるが佐藤は元気であり、大木は麦谷が佐藤のところへ向かっている事を佐藤から聞き、治療費の保険の申請に必要な診断書の事などを佐藤に聞かせた後、自分の下山の必要性はないと判断し、いったんベースに帰ることにした。この日はベースに戻るには遅い時間であったので剣沢で幕営後、翌日ベースに戻った。しかし28日から川井が私用で松本を離れ、麦谷は27日から合宿に途中参加することになっていて松本に事故後の対応にあたる人間がいなくなってしまうため、大木の提案で、大木が合宿をぬけ下山、佐藤の付き添いを含め事故後の対応あたる事に決定した。

27日、麦谷と入れ替わりに大木は下山し、以後佐藤の松本での治療に付き添った。他のメンバーはそのまま合宿を続行した。

(以上文中敬称略)

事故の原因と背景

【原因】

- ・佐藤の注意不足。浮石はそれと見て判断できるものであった。
- ・パーティーリーダーである日高の佐藤への注意不足。

【背景】

- ・アプローチの歩荷を終え1年生を中心に皆、疲労が溜まっていた。
 - ・登攀1日目にしては全体のムードが和やかであった。
 - ・この日、朝の体操をパーティー毎に行うようにしていたが、それが上級生同士が個人山行で岩に取付くような雰囲気を作ってしまう1年生をつれての登攀初日にとるべき選択ではなかった。
 - ・合宿の前段階で1年生に伝えるべき「本ちゃん（※）の危険性」を上級生が伝え切れていなかった。
 - ・基本的に毎年同じ場所で行われる合宿に対して上級生の中で慣れの意識が生まれ、緊張感に欠けていた。
 - ・長野・上田・伊那の上級生は普段、松本の1年生と岩トレでザイルを組む機会に乏しく、またそれ以外の接点も少なく、1年生の能力・性格などを把握しきれていなかった。
 - ・合宿に向ける上級生の意志統一が不十分であった。
- (※本ちゃん…無雪期のアルパインクライミングを指す。)

事故処理における問題点

- ・搬出法、救急法を合わせた自力救助能力が低い。
- ・下で留守を預かっている人や事故の知らせを聞いた人達は、今回、事故の正確な情報がつかめずに気をもんでいた。我々は、そのような我々をバックアップしてくれている人達の気持ちを理解する想像力を欠いていた。
- ・事故後、即決で現場の誰かを下山させるべきであった。
- ・事故を怪我の程度、事故の内容だけで判断していた。
- ・保護者への第一報は正確な情報がそろってからされるべきであった。

今後の対策

- ・登攀初日は1年生の疲労具合、全体の雰囲気など慎重に検討し万全を期して臨む。
- ・今年のように残雪が多かったりして例年とは取付きへのアプローチが異なる場合は上級生を偵察にむける。
- ・救急法・搬出法の講習会を11月に開き全員の技術の習得を図る
- ・隔地の上級生は1年生との接点を増やすべく努力をする。

佐藤の報告

まずはじめに、このたびは多くの方々に多大なご迷惑とご心配をおかけしました事を深くお詫び致します。事故当日、天気は快晴、夏合宿初めてのクライミングとあり、私のモチベーションも上々でした。剣岳八峰の雪渓も北アルプスの山々がそうであったように例年より多かったです。私はその日八峰のCフェースでクライミングをする予定でした。Aフェース直下の落石を受けない岩小屋で登山靴からクライミングシューズに履き替え、ハーネスその他のクライミングに必要な装備を用意した後出発しました。すぐに八峰Bフェース基部へと向うガレ場になり、そこは左が雪渓、右が岩壁でありました。そこを少し進むと雪渓が壁側に近づいて多少道が狭まっていました。私はその雪渓をよけるように右手にあった岩をてにとりました。右手に力を入れた瞬間、その岩は1cmほど動いたのですぐに押し返そうとしました。しかし岩は相当重たく、10秒くらいねばった挙句、その圧力に負け岩はそこから転げ落ち私の足に直撃して下へ落ちていきました。私の下にはたまたま人がいなくて他の負傷者が出なかったのは幸いでした。落石の大きさはおよそ1メートル角だったと思います。事故後のみなさんの判断は正確でした。私をすぐ熊の岩まで運び込み、怪我に対しては冷やすなどのその場でできる最善の処置を施してくれました。幸い外傷はなく右足の小指と薬指の骨折ですみました。山に対する経験の浅さと山にたする畏怖を身にしみて痛感しました。最後になりますが今回の事故では様々な方に支えられました。深く感謝致します。

佐藤祐樹

会計報告

(9月2日締め)

治療費	45,114円
交通費	26,390円

通信費	……	4,500円
その他雑費	……	6,839円
ヘリ出動費	…県警ヘリのため請求されず	

(これらの費用には夏合宿会計と不足分は遭難対策基金を補填した。)

終わりに

事故はその存在を忘れ、無視したときに、往々にして起きるものであると言えます。危険なイメージの強い登山に事故は付き物と思われがちですが遭難及び事故の内容をつぶさに検証しますと不可抗力と呼べる事故は数少なく、その多くは当事者の危険予知・認識・回避能力に欠落があった為と言わざる得ないものばかりです。今回我々が起こした事故も然りであります。事故を起こした事を反省し、もう2度と事故を起こすまいと思うならば山に登らない事が、極論ですが、最善の選択と言えます。しかしながらそれは我々の存在意義を否定するものであり逃避的な選択であります。登山における危険予知・認識・回避能力は登山を通じて体験的に培われるものであり、ならば我々にできる事と言えば謙虚に山と向き合い、地道に山行を重ねそれらの能力を身につけることとなります。

その過程において山行の引率、指導的立場にある人間は経験的に劣るメンバーの危険予知・認識・回避能力を全て担うわけでありそれは一時的にであるにせよ相手の命を預かる事になります。その認識を新たにしこれからの我々の取り組みの指針を述べるならば、今後は引率・指導的立場にある上級生の経験、能力、責任意識の向上、揺るぎ無き信頼の構築、自立的な登山の実践、この3つを基本軸に活動の強化を図る次第であります。

最後になりましたが、救助活動、事故後の対応にご尽力くださった皆様に心よりお詫び申し上げ、また、深く感謝いたします。

平成12年9月20日

信州大学山岳会代表 岸本 俊朗